

授業科目	スポーツ理学療法学 A		担当教員	綿谷 美佐子	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	スポーツ障害・外傷の理学療法領域における、外傷・障害の一般的な評価～治療までの流れと、実際の現場での理学療法士の取り組み、関わりについて理解する。				
到達目標	スポーツ障害・外傷における、その発生要因および誘因、特徴的な症状、スポーツ理学療法における検査、受傷・発症のメカニズム、治療・留意すべき点について、根拠を持って説明・記述できる。				
テキスト・参考図書等	臨床スポーツ医学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価する		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・解剖学、生理学、運動学の復習をして授業に臨むこと。・積極的に質問し、知識を吸収する姿勢で臨むこと。・動きやすく実技に取り組みやすい服装で受講すること。・授業態度の不良な者は厳しい対応をする。・医療人としての適正及び態度が不適な者、学習意欲のない者は授業への参加を認めない。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	上肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	2	上肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	3	上肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	4	上肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	5	下肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける下肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	6	下肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける下肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	7	下肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける下肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	8	下肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける下肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	9	頸部・体幹のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける頸部・体幹外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	10	頸部・体幹のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける頸部・体幹外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	11	頸部・体幹のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける頸部・体幹外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	12	頸部・体幹のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける頸部・体幹外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	13	障害者スポーツ	・障害者スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	14	障害者スポーツ	・障害者スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	15	障害者スポーツ	・障害者スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		

[illegible]

授業科目	スポーツ理学療法学 B		担当教員	綿谷 美佐子	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	スポーツ障害・外傷の理学療法領域における、外傷・障害の一般的な評価～治療までの流れと、実際の現場での理学療法士の取り組み、関わりについて理解する。				
到達目標	スポーツ障害・外傷における、その発生要因および誘因、特徴的な症状、スポーツ理学療法における検査、受傷・発症のメカニズム、治療・留意すべき点について、根拠を持って説明・記述できる。				
テキスト・参考図書等	臨床スポーツ医学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価する		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・解剖学、生理学、運動学の復習をして授業に臨むこと。・積極的に質問し、知識を吸収する姿勢で臨むこと。・動きやすく実技に取り組みやすい服装で受講すること。・授業態度の不良な者は厳しい対応をする。・医療人としての適正及び態度が不適な者、学習意欲のない者は授業への参加を認めない。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	上肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	2	上肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	3	上肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	4	上肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	5	下肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける下肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	6	下肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける下肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	7	下肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける下肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	8	下肢のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける下肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	9	頸部・体幹のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける頸部・体幹外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	10	頸部・体幹のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける頸部・体幹外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	11	頸部・体幹のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける頸部・体幹外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	12	頸部・体幹のスポーツ外傷および障害	・スポーツにおける頸部・体幹外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
	13	障害者スポーツ	・障害者スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス		
14	障害者スポーツ	・障害者スポーツにおける上肢外傷・障害の理学療法、・スポーツ現場での理学療法士の取り組み・関わり、・トピックス			

	15	障害者スポーツ	・ 障害者スポーツにおける上肢外傷・ 障害の理学療法、・ スポーツ現場での理学療法士の取り組み・ 関わり、・ トピ ックス
--	----	---------	---

授業科目	スポーツ理学療法学 B	担当 教員 実務 経験	本村遼介 有：■ 無：□	市内整形外科病院で理学療法士 として 5 年以上勤務
対象年次・学期	3 年・通年	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	チーム関係論 A		担当教員	目黒 文彦	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	リハビリテーションにおけるチームアプローチの重要性を学び、関連他職種に対する理解を深める。				
到達目標	リハビリテーションにおけるチームアプローチの重要性を理解する。				
テキスト・参考図書等	特に指定しません				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	提出課題の内容により評価。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	100			
	その他	0			
履修上の留意事項	良質のリハビリテーションサービスの提供には、関係職種との連携が不可欠であり、そのためには各職種の役割を理解する必要がある。関連職種の講義内容はレポートにまとめておくこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	チームアプローチ	リハビリテーションにおけるチームアプローチの重要性を知る		
	2	職種間の相互理解	理学療法士と作業療法士の相互理解が連携の基礎であることを知る		
	3	医療ソーシャルワーカーとは	医療ソーシャルワーカーの仕事、チームワーク		
	4	理学療法士とは	理学療法士の仕事、チームワーク		
	5	作業療法士とは	作業療法士の仕事、チームワーク		
	6	言語聴覚士とは	言語聴覚士の仕事、チームワーク		
	7	看護師とは	看護師の仕事、チームワーク		
	8	チーム連携のありかた	グループ討議とまとめを通じて連携の重要性への理解を深める		

[illegible]

授業科目	チーム関係論 B		担当教員	目黒 文彦	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	リハビリテーションにおけるチームアプローチの重要性を学び、関連他職種に対する理解を深める。				
到達目標	リハビリテーションにおけるチームアプローチの重要性を理解する。				
テキスト・参考図書等	特に指定しません				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	提出課題の内容により評価。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	100			
	その他	0			
履修上の留意事項	良質のリハビリテーションサービスの提供には、関係職種との連携が不可欠であり、そのためには各職種の役割を理解する必要がある。関連職種の講義内容はレポートにまとめておくこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	チームアプローチ	リハビリテーションにおけるチームアプローチの重要性を知る		
	2	職種間の相互理解	理学療法士と作業療法士の相互理解が連携の基礎であることを知る		
	3	作業療法士とは	作業療法士の仕事、チームワーク		
	4	理学療法士とは	理学療法士の仕事、チームワーク		
	5	言語聴覚士とは	言語聴覚士の仕事、チームワーク		
	6	医療ソーシャルワーカーとは	ソーシャルワーカーの仕事、チームワーク		
	7	看護師とは	看護師の仕事、チームワーク		
	8	チーム連携のありかた	グループ討議とまとめを通じて連携の重要性への理解を深める		

[illegible]

授業科目	運動器障害理学療法学実習 A		担当教員	吉田 智子	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数
					45 時間
授業目的	各関節の解剖学的特徴から評価・治療を理解し、実習を通じて技術の習熟を図る。機能障害と動作・生活との関連、問題点に対する適切な理学療法アプローチについて学ぶ。				
到達目標	1．運動器疾患に由来する特徴的な症状および障害を踏まえた評価項目を過不足無く立案・実施できる。 2．評価結果から機能障害と動作・生活との関連性、各評価間の関連を整理し問題点を抽出できる。 3．問題点に対し、根拠あるゴール設定・理学療法プログラムを立案できる。				
テキスト・参考図書等	筋骨格系のキネシオロジー 第3版 標準整形外科学 第15版 Crosslink 理学療法学テキスト 運動器障害理学療法学 第1版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	前期および後期定期試験にて評価する。 前期・後期それぞれ 60 点以上で合格とする。 総合評定は前期および後期の合算とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・実習の授業の際は動きやすい服装で授業に参加すること。 ・運動療法と運動器疾患の復習をして授業に臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	足部・足関節疾患の評価方法	足部・足関節疾患の機能解剖を復習し、画像評価および評価手技の実習を通して確認する		
	2	足関節捻挫の理学療法	足関節捻挫の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	3	足関節捻挫の理学療法	足関節捻挫の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	4	アキレス腱断裂の理学療法	アキレス腱断裂の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	5	足関節果部骨折の理学療法	足関節果部骨折の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	6	膝関節疾患の評価方法	膝関節疾患の機能解剖を復習し、画像評価および評価手技の実習を通して確認する		
	7	変形性膝関節症の理学療法	変形性膝関節症の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	8	膝前十字靱帯損傷の理学療法	膝前十字靱帯損傷の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	9	半月板損傷の理学療法	半月板損傷の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	10	股関節疾患の評価方法	股関節疾患の機能解剖を復習し、画像評価および評価手技の実習を通して確認する		
	11	変形性股関節症の理学療法	変形性股関節症の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	12	大腿骨頸部・転子部骨折の理学療法	大腿骨頸部・転子部骨折の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	13	腰部	機能解剖・評価・治療		

	14	腰部	機能解剖・評価・治療
	15	腰部	機能解剖・評価・治療
	16	腰部	機能解剖・評価・治療
	17	肩関節	機能解剖・評価・治療
	18	肩関節	機能解剖・評価・治療
	19	肘・手関節	機能解剖・評価・治療
	20	肘・手関節	機能解剖・評価・治療
	21	超音波エコー	
	22	機能的エクササイズ	機能的視点からの評価とエクササイズの実際（ダイナミックアライメントの捉え方、メニュー作成など）サーキットトレーニング・コンディショニングの実際
	23	機能的エクササイズ	機能的視点からの評価とエクササイズの実際（ダイナミックアライメントの捉え方、メニュー作成など）サーキットトレーニング・コンディショニングの実際

[illegible]

授業科目	運動器障害理学療法学実習 B		担当教員	吉田 智子	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数
				45 時間	
授業目的	各関節の解剖学的特徴から評価・治療を理解し、実習を通じて技術の習熟を図る。機能障害と動作・生活との関連、問題点に対する適切な理学療法アプローチについて学ぶ。				
到達目標	1．運動器疾患に由来する特徴的な症状および障害を踏まえた評価項目を過不足無く立案・実施できる。 2．評価結果から機能障害と動作・生活との関連性、各評価間の関連を整理し問題点を抽出できる。 3．問題点に対し、根拠あるゴール設定・理学療法プログラムを立案できる。				
テキスト・参考図書等	筋骨格系のキネシオロジー 第3版 標準整形外科学 第15版 Crosslink 理学療法学テキスト 運動器障害理学療法学 第1版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	前期および後期定期試験にて評価する。 前期・後期それぞれ 60 点以上で合格とする。 総合評定は前期および後期の合算とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・実習の授業の際は動きやすい服装で授業に参加すること。 ・運動療法と運動器疾患の復習をして授業に臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	足部・足関節疾患の評価方法	足部・足関節疾患の機能解剖を復習し、画像評価および評価手技を実習を通して確認する		
	2	足関節捻挫の理学療法	足関節捻挫の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	3	足関節捻挫の理学療法	足関節捻挫の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	4	アキレス腱断裂の理学療法	アキレス腱断裂の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	5	足関節果部骨折の理学療法	足関節果部骨折の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	6	膝関節疾患の評価方法	膝関節疾患の機能解剖を復習し、画像評価および評価手技を実習を通して確認する		
	7	変形性膝関節症の理学療法	変形性膝関節症の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	8	膝前十字靱帯損傷の理学療法	膝前十字靱帯損傷の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	9	半月板損傷の理学療法	半月板損傷の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	10	股関節疾患の評価方法	股関節疾患の機能解剖を復習し、画像評価および評価手技を実習を通して確認する		
	11	変形性股関節症の理学療法	変形性股関節症の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	12	大腿骨頸部・転子部骨折の理学療法	大腿骨頸部・転子部骨折の症例を元に、理学療法評価を立案する。評価結果から問題点を抽出し、ゴール設定、治療プログラムを立案する		
	13	腰部	機能解剖・評価・治療		

	14	腰部	機能解剖・評価・治療
	15	腰部	機能解剖・評価・治療
	16	腰部	機能解剖・評価・治療
	17	肩関節	機能解剖・評価・治療
	18	肩関節	機能解剖・評価・治療
	19	肘・手関節	機能解剖・評価・治療
	20	肘・手関節	機能解剖・評価・治療
	21	超音波エコー	
	22	機能的エクササイズ	機能的視点からの評価とエクササイズの実際（ダイナミックアライメントの捉え方、メニュー作成など）、サーキットトレーニング・コンディショニングの実際
	23	機能的エクササイズ	機能的視点からの評価とエクササイズの実際（ダイナミックアライメントの捉え方、メニュー作成など）、サーキットトレーニング・コンディショニングの実際

[illegible]

授業科目	義肢装具学 A		担当教員	小野 直也	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	義肢装具の基本を学ぶ。義肢の理解を深める。PT として義足に関する最近の動向を理解する。手の装具についての理解を深める。				
到達目標	・切断の意義を説明できる。 ・義肢の役割を機能的に、運動学・運動力学的に説明できる。				
テキスト・参考図書等	15 レクチャーシリーズ理学療法テキスト義肢学 参考図書：義肢装具のチェックポイント第 7 版、切断と義肢				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	力学的な視点からの考察が必要となる。具体的にイメージできるように積極的に学ぶこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	義肢学	切断の部位・原因、義足の基礎知識		
	2	義肢学	義足のベンチアライメント、大腿義足のソケット		
	3	義肢学	大腿義足の膝継手・装着部品		
	4	義肢学	大腿義足のベンチアライメント、スタティックアライメント		
	5	義肢学	大腿義足のダイナミックアライメントと異常歩行		
	6	義肢学	下腿義足のソケット		
	7	義肢学	下腿義足のベンチアライメント、スタティックアライメント、ダイナミックアライメント		
	8	義肢学	サイム切断、股義足、義足の足部		
	9	義肢学	切断の良肢位保持、幻肢痛について、義足での ADL		
	10	義手学	義手		
	11	装具学	上肢装具		
	12	義肢学	義足の基礎と臨床応用		
	13	義肢学	義足の基礎と臨床応用		
	14	義肢学	義足の基礎と臨床応用		
	15	義肢学	義足の基礎と臨床応用		

[illegible]

授業科目	義肢装具学 B		担当教員	小野 直也	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	義肢装具の基本を学ぶ。義肢の理解を深める。PT として義足に関する最近の動向を理解する。手の装具についての理解を深める。				
到達目標	・切断の意義を説明できる。 ・義肢の役割を機能的に、運動学・運動力学的に説明できる。				
テキスト・参考図書等	15 レクチャーシリーズ理学療法テキスト義肢学 参考図書：義肢装具のチェックポイント第 7 版、切断と義肢				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	力学的な視点からの考察が必要となる。具体的にイメージできるように積極的に学ぶこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	義肢学	切断の部位・原因、義足の基礎知識		
	2	義肢学	義足のベンチアライメント、大腿義足のソケット		
	3	義肢学	大腿義足の膝継手・装着部品		
	4	義肢学	大腿義足のベンチアライメント、スタティックアライメント		
	5	義肢学	大腿義足のダイナミックアライメントと異常歩行		
	6	義肢学	下腿義足のソケット		
	7	義肢学	下腿義足のベンチアライメント、スタティックアライメント、ダイナミックアライメント		
	8	義肢学	サイム切断、股義足、義足の足部		
	9	義肢学	切断の良肢位保持、幻肢痛について、義足での ADL		
	10	義手学	義手		
	11	装具学	上肢装具		
	12	義肢学	義足の基礎と臨床応用		
	13	義肢学	義足の基礎と臨床応用		
	14	義肢学	義足の基礎と臨床応用		
	15	義肢学	義足の基礎と臨床応用		

授業科目	義肢装具学 B	担当 教員 実務 経験	小野直也 有：■ 無：□	市内回復期病院にて理学療法士 として 5 年間勤務
対象年次・学期	3 年・前期	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	義肢装具学実習 A		担当教員	武田 祐貴	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数 45 時間
授業目的	装具に関する基礎的知識と疾患ごとの適応、適合判定について学習する。				
到達目標	理学療法における装具の意義を理解し、説明できる。 疾患ごとの適応を理解し、説明することができる。 装具の適合判定を実施できる。				
テキスト・参考図書等	イラストでわかる装具療法 参考図書：義肢装具のチェックポイント（第 7 版）				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価し 60 点/100 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	装具は覚えることが多いので、日々集中して取り組むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	装具総論	装具の定義、歴史、目的等について学習する		
	2	装具の基本と装具体験	自身で装具を着用する体験を通して、装具の基本について学ぶ。		
	3	装具の基本と装具体験	自身で装具を着用する体験を通して、装具の基本について学ぶ。		
	4	短下肢装具	短下肢装具の概要について学ぶ。		
	5	長下肢装具	長下肢装具の概要について学ぶ。		
	6	脳卒中者の装具療法	脳卒中者の装具療法の概要について学ぶ。		
	7	脳卒中者の装具療法	脳卒中者の装具療法について、種類や適応を学ぶ。		
	8	脳卒中患者の装具装着下の歩行	論文抄読を通して、脳卒中者の装具療法について学ぶ。		
	9	脳卒中患者の装具装着下の歩行	論文抄読を通して、脳卒中者の装具療法について学ぶ。		
	10	下肢装具のチェックアウト	下肢装具のチェックアウトのポイントや方法について学ぶ。		
	11	下肢装具のチェックアウト	下肢装具のチェックアウトのポイントや方法について学ぶ。		
	12	靴型装具	靴型装具の概要と適応について学ぶ。		
	13	靴型装具	靴型装具の概要と適応について学ぶ。		
	14	リハビリテーション・ロボティクス	リハビリテーションに用いるロボティクスについて学ぶ。		
	15	リハビリテーション・ロボティクス	リハビリテーションに用いるロボティクスについて学ぶ。		
	16	体幹装具	体幹装具の構造、種類、特徴、適合判定について学習する		
	17	体幹装具	体幹装具の構造、種類、特徴、適合判定について学習する		
	18	運動器疾患に対する装具適応	運動器疾患に対する装具の適応について学習する		
	19	運動器疾患に対する装具適応	運動器疾患に対する装具の適応について学習する		
	20	小児疾患に対する装具適応	小児疾患に対する装具の適応について学習する		

	21	小児疾患に対する装具適応	小児疾患に対する装具の適応について学習する
	22	上肢装具	上肢装具の概要と適応について学ぶ。
	23	まとめ	装具療法について総まとめを行う。

授業科目	義肢装具学実習 A	担当 教員 実務 経験	外部講師 有：■ 無：□	市内病院勤務の理学療法士
対象年次・学期	3 年・前期	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	義肢装具学実習 B		担当教員	武田 祐貴	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数 45 時間
授業目的	装具に関する基礎的知識と疾患ごとの適応、適合判定について学習する。				
到達目標	理学療法における装具の意義を理解し、説明できる。 疾患ごとの適応を理解し、説明することができる。 装具の適合判定を実施できる。				
テキスト・参考図書等	イラストでわかる装具療法 参考図書：義肢装具のチェックポイント（第 7 版）				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価し 60 点/100 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	装具は覚えることが多いので、日々集中して取り組むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	装具総論	装具の定義、歴史、目的等について学習する		
	2	装具の基本と装具体験	自身で装具を着用する体験を通して、装具の基本について学ぶ。		
	3	装具の基本と装具体験	自身で装具を着用する体験を通して、装具の基本について学ぶ。		
	4	短下肢装具	短下肢装具の概要について学ぶ。		
	5	長下肢装具	長下肢装具の概要について学ぶ。		
	6	脳卒中者の装具療法	脳卒中者の装具療法の概要について学ぶ。		
	7	脳卒中者の装具療法	脳卒中者の装具療法について、種類や適応を学ぶ。		
	8	脳卒中患者の装具装着下の歩行	論文抄読を通して、脳卒中者の装具療法について学ぶ。		
	9	脳卒中患者の装具装着下の歩行	論文抄読を通して、脳卒中者の装具療法について学ぶ。		
	10	下肢装具のチェックアウト	下肢装具のチェックアウトのポイントや方法について学ぶ。		
	11	下肢装具のチェックアウト	下肢装具のチェックアウトのポイントや方法について学ぶ。		
	12	靴型装具	靴型装具の概要と適応について学ぶ。		
	13	靴型装具	靴型装具の概要と適応について学ぶ。		
	14	リハビリテーション・ロボティクス	リハビリテーションに用いるロボティクスについて学ぶ。		
	15	リハビリテーション・ロボティクス	リハビリテーションに用いるロボティクスについて学ぶ。		
	16	体幹装具	体幹装具の構造、種類、特徴、適合判定について学習する		
	17	体幹装具	体幹装具の構造、種類、特徴、適合判定について学習する		
	18	運動器疾患に対する装具適応	運動器疾患に対する装具の適応について学習する		
	19	運動器疾患に対する装具適応	運動器疾患に対する装具の適応について学習する		
	20	小児疾患に対する装具適応	小児疾患に対する装具の適応について学習する		

	21	小児疾患に対する装具適応	小児疾患に対する装具の適応について学習する
	22	上肢装具	上肢装具の概要と適応について学ぶ。
	23	まとめ	装具療法について総まとめを行う。

[illegible]

授業科目	社会福祉学 A	担当教員	鈴木 道代		
対象年次・学期	3 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	社会福祉とは何か、それを必要とする人々や生活とはどういう状況であるかを理解することが目的である。また、現在の社会福祉の理念、様々な社会福祉法制の仕組み、サービス体系についても学習する。以上を踏まえて、現代社会において社会福祉を必要とする人々への理解を深めてもらいたい。				
到達目標	「社会福祉」という概念を理解できる。 生活との関連で社会福祉を必要とする対象者を理解できる。 様々な社会福祉法制・サービス体系を理解し、その概略を説明できる。 ～ の理解を通して生活における社会福祉の必要性を説明できるようになる。				
テキスト・参考図書等	プリント配布（各自ファイリングし、毎回持参すること） なお、公欠以外のプリント再配布はしない 参考書：『社会福祉用語辞典』山縣文治ら編（2013）ミネルヴァ書房、『現代の社会福祉』鈴木幸雄編（2012）中央法規 など				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験、提出物点を合算して評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	10			
	その他	0			
履修上の留意事項	後半の授業では視聴覚機材を用いる。 また、学生に意見を求める場合、積極的な発言を求める。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション 社会福祉の意義 ～ 社会福祉とは何かを考える	・ 授業の説明 ・ 社会福祉の定義		
	2	社会福祉の仕組みと生活 ～ 生活概念を学ぶ	・ 生活概念について		
	3	社会福祉の仕組みと生活 ～ 社会福祉の仕組みと対象者、法的枠組みを学ぶ	・ 社会福祉の対象を学生に確認する ・ 社会福祉の対象について説明する ・ 社会福祉法、社会福祉法制について説明する ・ 社会福祉の利用形態・給付形態を説明する		
	4	社会福祉の利用形態と援助方法 ～ 社会福祉を担う専門職とソーシャルワークの視点について学ぶ	・ 社会福祉を担う専門職 ・ ソーシャルワークの視点 ・ コミュニケーションの構成要素		
	5	社会福祉の利用形態と援助方法 ～ 社会福祉で活用する援助方法を事例から学ぶ	・ 個別援助技術について説明 ・ バイスティックの 7 原則 ・ 関連援助技術		
	6	現代社会の変化～現代社会の人口動態や家族構成の変化を学ぶ	・ 年齢 3 区分 ・ 少子社会・高齢社会の現状 ・ 家族形態の変化・家族観・機能		
	7	児童家庭福祉 ～ 児童家庭福祉の概要と児童虐待防止法を学ぶ	・ 児童福祉の概念 ・ 児童福祉法・児童憲章 ・ 児童虐待防止法 ・ 児童養護施設（DVD 視聴）		
	8	児童家庭福祉 ～ ひとり親家庭への支援と特別養子縁組を学ぶ	・ ひとり親家庭の実態と施策 ・ 特別養子縁組について（DVD 視聴）		
	9	障害者福祉 ～ 障害概念とノーマライゼーションを学ぶ	・ 障害概念 ・ ノーマライゼーション（DVD 視聴）		
	10	障害者福祉 ～ 障害者福祉の対象、就労、障害者差別解消法を学ぶ	・ 障害者福祉の対象 ・ 障害者雇用促進法 ・ 障害者差別解消法 ・ DVD（発達障害）視聴		

	11	低所得者福祉 ～ 貧困概念とその現状、貧困の連鎖について学ぶ	・絶対的水準論、相対的水準論 ・集団の連鎖（DVD 視聴）
	12	低所得者福祉 ～ 生活保護の概要、実態、生活困窮者自立支援の概要を学ぶ	・生活困窮者自立支援（DVD 視聴） ・生活保護法
	13	高齢者福祉 ～ 介護保険制度の概要を学ぶ	・介護保険制度
	14	高齢者福祉 ～ 高齢者概念と老化、生きがいについて学ぶ	・高齢者の定義 ・老化と生きがい
	15	高齢者福祉 ～ 認知症高齢者の現状を学ぶ	・高齢期の身体的特性と精神的特性 ・DVD 視聴

[illegible]

授業科目	社会福祉学 B		担当教員	鈴木 道代	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	社会福祉とは何か、それを必要とする人々や生活とはどういう状況であるかを理解することが目的である。また、現在の社会福祉の理念、様々な社会福祉法制的仕組み、サービス体系についても学習する。以上を踏まえて、現代社会において社会福祉を必要とする人々への理解を深めてもらいたい。				
到達目標	「社会福祉」という概念を理解できる。 生活との関連で社会福祉を必要とする対象者を理解できる。 様々な社会福祉法制・サービス体系を理解し、その概略を説明できる。 ～ の理解を通して生活における社会福祉の必要性を説明できるようになる。				
テキスト・参考図書等	プリント配布（各自ファイリングし、毎回持参すること） なお、公欠以外のプリント再配布はしない 参考書：『社会福祉用語辞典』山縣文治ら編（2013）ミネルヴァ書房、『現代の社会福祉』鈴木幸雄編（2012）中央法規 など				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験、提出物点を合算して評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	10			
	その他	0			
履修上の留意事項	後半の授業では視聴覚機材を用いる。 また、学生に意見を求める場合、積極的な発言を求める。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション 社会福祉の意義 ～ 社会福祉とは何かを考える	・ 授業の説明 ・ 社会福祉の定義		
	2	社会福祉の仕組みと生活 ～ 生活概念を学ぶ	・ 生活概念について		
	3	社会福祉の仕組みと生活 ～ 社会福祉の仕組みと対象者、法的枠組みを学ぶ	・ 社会福祉の対象を学生に確認する ・ 社会福祉の対象について説明する ・ 社会福祉法、社会福祉法制について説明する ・ 社会福祉の利用形態・給付形態を説明する		
	4	社会福祉の利用形態と援助方法 ～ 社会福祉を担う専門職とソーシャルワークの視点について学ぶ	・ 社会福祉を担う専門職 ・ ソーシャルワークの視点 ・ コミュニケーションの構成要素		
	5	社会福祉の利用形態と援助方法 ～ 社会福祉で活用する援助方法を事例から学ぶ	・ 個別援助技術について説明 ・ バイスティックの 7 原則 ・ 関連援助技術		
	6	現代社会の変化～現代社会の人口動態や家族構成の変化を学ぶ	・ 年齢 3 区分 ・ 少子社会・高齢社会の現状 ・ 家族形態の変化・家族観・機能		
	7	児童家庭福祉 ～ 児童家庭福祉の概要と児童虐待防止法を学ぶ	・ 児童福祉の概念 ・ 児童福祉法・児童憲章 ・ 児童虐待防止法 ・ 児童養護施設（DVD 視聴）		
	8	児童家庭福祉 ～ ひとり親家庭への支援と特別養子縁組を学ぶ	・ ひとり親家庭の実態と施策 ・ 特別養子縁組について（DVD 視聴）		
	9	障害者福祉 ～ 障害概念とノーマライゼーションを学ぶ	・ 障害概念 ・ ノーマライゼーション（DVD 視聴）		
	10	障害者福祉 ～ 障害者福祉の対象、就労、障害者差別解消法を学ぶ	・ 障害者福祉の対象 ・ 障害者雇用促進法 ・ 障害者差別解消法 ・ DVD（発達障害）視聴		

	11	低所得者福祉 ～ 貧困概念とその現状、貧困の連鎖について学ぶ	・絶対的水準論、相対的水準論 ・集団の連鎖（DVD 視聴）
	12	低所得者福祉 ～ 生活保護の概要、実態、生活困窮者自立支援の概要を学ぶ	・生活困窮者自立支援（DVD 視聴） ・生活保護法
	13	高齢者福祉 ～ 介護保険制度の概要を学ぶ	・介護保険制度
	14	高齢者福祉 ～ 高齢者概念と老化、生きがいについて学ぶ	・高齢者の定義 ・老化と生きがい
	15	高齢者福祉 ～ 認知症高齢者の現状を学ぶ	・高齢期の身体的特性と精神的特性 ・DVD 視聴

[illegible]

授業科目	神経障害理学療法学実習 A		担当教員	武田 祐貴	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数 45 時間
授業目的	・各疾患の特徴と、それによって生じる運動障害について理解を深める。 ・各疾患の理学療法アプローチについて学習する。				
到達目標	・各疾患の運動障害の特徴について説明することができる。 ・各疾患に対する理学療法アプローチ（評価、プログラム、リスク管理など）について説明できる。				
テキスト・参考図書等	病気がみえる 脳・神経 vol.7 第2版 標準理学療法学専門分野 神経理学療法学 第3版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験で前期、後期それぞれ6割以上をとることで合格とする（前期後期の合算で6割ではないので注意すること）。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	各疾患に対する理学療法の実施にあたっては、疾患に対する基礎知識が不可欠である。理解が不十分な人は事前に復習しておくこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	2	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	3	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	4	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	5	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	6	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	7	中枢神経系の構造と機能	中枢神経系の構造と機能について復習する。		
	8	大脳の機能局在と高次脳機能	大脳の機能局在と高次脳機能について学ぶ。		
	9	脳卒中者の理学療法評価	脳卒中者の理学療法評価について学ぶ。		
	10	脳卒中者の画像評価	脳卒中者の画像評価について学ぶ。		
	11	脳卒中者の歩行評価	脳卒中者の歩行評価について学ぶ。		
	12	脳卒中の病態とリスク管理	脳卒中の病態と脳卒中理学療法におけるリスク管理について理解する。また、脳卒中理学療法の開始基準と中止基準について理解する。		
	13	脳卒中の障害構造（ICF）	脳卒中後の障害構造を理解し、障害に対する評価・ゴール設定・プログラム立案・効果判定について考察できるようになる。また、脳卒中後の障害に対する病期別の理学療法士の役割を理解する。		
	14	脳卒中の理学療法	脳卒中後の運動機能回復のメカニズムと運動機能回復を阻害するものについて理解する。さらに、脳卒中後の運動機能障害に対する治療を学ぶ。		

	15	臨床推論とケーススタディ	脳卒中の各時期における理学療法の展開について学び、それぞれの時期で実施される理学療法プログラムを科学的根拠に基づいて考える。
	16	臨床推論とケーススタディ	臨床推論の過程と仮説証明作業について理解する。また、ケーススタディを通じて脳卒中の各時期における理学療法の展開について学ぶ。
	17	難病・神経筋疾患	難病・神経筋疾患の病態と治療方針について理解する。また、それぞれの障害に対する評価の目的と実際について理解する。 対象とする疾患は以下の通りとする。 【パーキンソン病、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症、多発性硬化症、ギラン・バレー症候群】
	18	脳卒中患者の理学療法	脳卒中患者に対する理学療法について学ぶ。
	19	神経筋疾患の理学療法	神経筋疾患の理学療法について学ぶ。
	20	神経難病の理学療法	パーキンソン病・脊髄小脳変性症・多発性硬化症・筋萎縮性側索硬化症・その他の神経難病疾患の障害と理学療法
	21	神経難病の理学療法	パーキンソン病・脊髄小脳変性症・多発性硬化症・筋萎縮性側索硬化症・その他の神経難病疾患の障害と理学療法
	22	神経難病の理学療法	パーキンソン病・脊髄小脳変性症・多発性硬化症・筋萎縮性側索硬化症・その他の神経難病疾患の障害と理学療法
	23	神経難病の理学療法	パーキンソン病・脊髄小脳変性症・多発性硬化症・筋萎縮性側索硬化症・その他の神経難病疾患の障害と理学療法

[illegible]

授業科目	神経障害理学療法学実習 B		担当教員	武田 祐貴	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数 45 時間
授業目的	・各疾患の特徴と、それによって生じる運動障害について理解を深める。 ・各疾患の理学療法アプローチについて学習する。				
到達目標	・各疾患の運動障害の特徴について説明することができる。 ・各疾患に対する理学療法アプローチ（評価、プログラム、リスク管理など）について説明できる。				
テキスト・参考図書等	病気がみえる 脳・神経 vol.7 第2版 標準理学療法学専門分野 神経理学療法学 第3版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験で前期、後期それぞれ6割以上をとることで合格とする（前期後期の合算で6割ではないので注意すること）。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	各疾患に対する理学療法の実施にあたっては、疾患に対する基礎知識が不可欠である。理解が不十分な人は事前に復習しておくこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	2	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	3	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	4	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	5	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	6	脊髄損傷の理学療法	脊髄損傷と、それに伴う運動障害の特徴について学習する、脊髄損傷の理学療法評価について学習する、脊髄損傷の理学療法について学習する		
	7	中枢神経系の構造と機能	中枢神経系の構造と機能について復習する。		
	8	大脳の機能局在と高次脳機能	大脳の機能局在と高次脳機能について学ぶ。		
	9	脳卒中者の理学療法評価	脳卒中者の理学療法評価について学ぶ。		
	10	脳卒中者の画像評価	脳卒中者の画像評価について学ぶ。		
	11	脳卒中者の歩行評価	脳卒中者の歩行評価について学ぶ。		
	12	脳卒中の病態とリスク管理	脳卒中の病態と脳卒中理学療法におけるリスク管理について理解する。また、脳卒中理学療法の開始基準と中止基準について理解する。		
	13	脳卒中の障害構造（ICF）	脳卒中後の障害構造を理解し、障害に対する評価・ゴール設定・プログラム立案・効果判定について考察できるようになる。また、脳卒中後の障害に対する病期別の理学療法士の役割を理解する。		
	14	脳卒中の理学療法	脳卒中後の運動機能回復のメカニズムと運動機能回復を阻害するものについて理解する。さらに、脳卒中後の運動機能障害に対する治療を学ぶ。		

	15	臨床推論とケーススタディ	脳卒中の各時期における理学療法の展開について学び、それぞれの時期で実施される理学療法プログラムを科学的根拠に基づいて考える。
	16	臨床推論とケーススタディ	臨床推論の過程と仮説証明作業について理解する。また、ケーススタディを通じて脳卒中の各時期における理学療法の展開について学ぶ。
	17	難病・神経筋疾患	難病・神経筋疾患の病態と治療方針について理解する。また、それぞれの障害に対する評価の目的と実際について理解する。 対象とする疾患は以下の通りとする。 【パーキンソン病、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症、多発性硬化症、ギラン・バレー症候群】
	18	脳卒中患者の理学療法	脳卒中患者に対する理学療法について学ぶ。
	19	神経筋疾患の理学療法	神経筋疾患の理学療法について学ぶ。
	20	神経難病の理学療法	パーキンソン病・脊髄小脳変性症・多発性硬化症・筋萎縮性側索硬化症・その他の神経難病疾患の障害と理学療法
	21	神経難病の理学療法	パーキンソン病・脊髄小脳変性症・多発性硬化症・筋萎縮性側索硬化症・その他の神経難病疾患の障害と理学療法
	22	神経難病の理学療法	パーキンソン病・脊髄小脳変性症・多発性硬化症・筋萎縮性側索硬化症・その他の神経難病疾患の障害と理学療法
	23	神経難病の理学療法	パーキンソン病・脊髄小脳変性症・多発性硬化症・筋萎縮性側索硬化症・その他の神経難病疾患の障害と理学療法

[illegible]

授業科目	生活環境論 A		担当教員	竹中 謙将	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	障害者・高齢者の生活を支援するために、社会・文化のおよび物的・人的環境の視点から包括的にハンディキャップを捉えるための基本的知識について学ぶ。さらに、住環境の評価と物的改善技術の知識、他分野の役割と関連について学ぶ。				
到達目標	・福祉用具について説明できる。 ・障害者の環境設定について考えることができる。				
テキスト・参考図書等	配布資料 参考図書：生活環境論 OT・PT のための住環境整備論 第2版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	レポート等の提出物及び内容により評価する。 A：全て提出し、内容が充分 B：1度の提出遅れ、内容が充分 C：2度の提出遅れ、内容が充分 D：3度以上の提出遅れ、又は内容不十分 どのケースにも該当しない場合は精査し、該当学生へ伝える。		
	レポート	60			
	小テスト	0			
	提出物	40			
	その他	0			
履修上の留意事項	実習や体験学習の多い学科なので、自ら学ぼうという姿勢を忘れずに授業に臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション			
	2	環境整備の基本的考え方	・ノーマライゼーション、バリアフリー、・環境整備の個別性と汎用性、・他職種の役割と連携		
	3	高齢者・障害者の生活特性と環境整備	・加齢の身体特性、・視覚障害、聴覚障害、・移動能力別にみた環境整備		
	4	住宅改造の基本的知識	・建築面の基礎知識、・疾患別にみた整備指導		
	5	間取り図の作成	・図面の基礎知識、・間取り図の作成演習		
	6	福祉機器の見学	・福祉機器の展示場を見学する		
	7	福祉機器の見学	・福祉機器の展示場を見学する		
	8	福祉車両の見学	・福祉車両の展示場を見学する		
	9	福祉車両の見学	・福祉車両の展示場を見学する		
	10	住宅改造	・高齢者・身体障害者に対応した住宅		
	11	住宅改造	・高齢者・身体障害者に対応した住宅		
	12	住宅改造	・高齢者・身体障害者に対応した住宅		
	13	住宅改造	・高齢者・身体障害者に対応した住宅		
	14	日常生活用具	・日常生活用具、自助具について学習する		
	15	日常生活用具	・日常生活用具、自助具について学習する		

[illegible]

授業科目	生活環境論 B		担当教員	竹中 謙将	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	障害者・高齢者の生活を支援するために、社会・文化のおよび物的・人的環境の視点から包括的にハンディキャップを捉えるための基本的知識について学ぶ。さらに、住環境の評価と物的改善技術の知識、他分野の役割と関連について学ぶ。				
到達目標	・福祉用具について説明できる。 ・障害者の環境設定について考えることができる。				
テキスト・参考図書等	配布資料 参考図書：生活環境論 OT・PT のための住環境整備論 第2版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	レポート等の提出物及び内容により評価する。 A：全て提出し、内容が充分 B：1 度の提出遅れ、内容が充分 C：2 度の提出遅れ、内容が充分 D：3 度以上の提出遅れ、又は内容不十分 どのケースにも該当しない場合は精査し、該当学生へ伝える。		
	レポート	60			
	小テスト	0			
	提出物	40			
	その他	0			
履修上の留意事項	実習や体験学習の多い学科なので、自ら学ぼうという姿勢を忘れずに授業に臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション			
	2	環境整備の基本的考え方	・ノーマライゼーション、バリアフリー、・環境整備の個別性と汎用性、・他職種の役割と連携		
	3	高齢者・障害者の生活特性と環境整備	・加齢の身体特性、・視覚障害、聴覚障害、・移動能力別にみた環境整備		
	4	住宅改造の基本的知識	・建築面の基礎知識、・疾患別にみた整備指導		
	5	間取り図の作成	・図面の基礎知識、・間取り図の作成演習		
	6	福祉機器の見学	・福祉機器の展示場を見学する		
	7	福祉機器の見学	・福祉機器の展示場を見学する		
	8	福祉車両の見学	・福祉車両の展示場を見学する		
	9	福祉車両の見学	・福祉車両の展示場を見学する		
	10	住宅改造	・高齢者・身体障害者に対応した住宅		
	11	住宅改造	・高齢者・身体障害者に対応した住宅		
	12	住宅改造	・高齢者・身体障害者に対応した住宅		
	13	住宅改造	・高齢者・身体障害者に対応した住宅		
	14	日常生活用具	・日常生活用具、自助具について学習する		
	15	日常生活用具	・日常生活用具、自助具について学習する		

[illegible]

授業科目	地域包括マネジメント論 A		担当教員	武田 祐貴	
対象年次・学期	3 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数 15 時間
授業目的	多様な健康レベルの人の在宅移行可能性を推進するために、関連する保健医療福祉の諸制度や歴史を概観し、質の高い在宅リハを提供するために必要な知識であるケアマネジメント、関係機関・職種の役割と関係性を学ぶ。				
到達目標	幅広い在宅リハにおける活動の展望を見据え、地域における活動の現状の分析を行い、生活の質を重視した退院支援・調整、地域のネットワーク構築の方法やあるべき制度について理解する。				
テキスト・参考図書等	無し ライフステージから学ぶ地域包括リハビリテーション実践マニュアル 地域包括ケアにおける PT・OT の役割				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験において、100 点満点中 60 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	高齢化の進展に伴う医療需要の増大や、地域包括ケアシステムの構築などにより、理学療法士に求められる役割や知識が変化している。理学療法士を取り巻く環境の変化に対応できるよう学ぶこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	地域リハ活動・地域包括ケアシステム	地域包括ケアシステムの概要を学ぶ		
	2	地域リハにおける関連諸制度	地域リハに関連する諸制度について学ぶ		
	3	地域リハにおける関連他職種	地域リハに関連する他職種について学ぶ		
	4	地域生活への移行	退院時に必要な地域生活の準備について学ぶ		
	5	地域生活におけるライフステージごとの課題	各年代における地域生活の課題について学ぶ		
	6	地域包括ケアと多職種連携 1	他学科の学生とのグループワークを通じて多職種連携を学ぶ (自己紹介、各専門職種の特徴)		
	7	地域包括ケアと多職種連携 2	他学科の学生とのグループワークを通じて多職種連携を学ぶ (各専門職学生による事例検討)		
	8	地域包括ケアと多職種連携 3	他学科の学生とのグループワークを通じて多職種連携を学ぶ (発表)		

[illegible]

授業科目	地域包括マネジメント論 B		担当教員	武田 祐貴	
対象年次・学期	3 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	多様な健康レベルの人の在宅移行可能性を推進するために、関連する保健医療福祉の諸制度や歴史を概観し、質の高い在宅リハを提供するために必要な知識であるケアマネジメント、関係機関・職種の役割と関係性を学ぶ。				
到達目標	幅広い在宅リハにおける活動の展望を見据え、地域における活動の現状の分析を行い、生活の質を重視した退院支援・調整、地域のネットワーク構築の方法やあるべき制度について理解する。				
テキスト・参考図書等	無し ライフステージから学ぶ地域包括リハビリテーション実践マニュアル 地域包括ケアにおける PT・OT の役割				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験において、100 点満点中 60 点以上が合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	高齢化の進展に伴う医療需要の増大や、地域包括ケアシステムの構築などにより、理学療法士に求められる役割や知識が変化している。理学療法士を取り巻く環境の変化に対応できるよう学ぶこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	地域リハ活動・地域包括ケアシステム	地域包括ケアシステムの概要を学ぶ		
	2	地域リハにおける関連諸制度	地域リハに関連する諸制度について学ぶ		
	3	地域リハにおける関連他職種	地域リハに関連する他職種について学ぶ		
	4	地域生活への移行	退院時に必要な地域生活の準備について学ぶ		
	5	地域生活におけるライフステージごとの課題	各年代における地域生活の課題について学ぶ		
	6	地域包括ケアと多職種連携 1	他学科の学生とのグループワークを通じて多職種連携を学ぶ (自己紹介、各専門職種の特徴)		
	7	地域包括ケアと多職種連携 2	他学科の学生とのグループワークを通じて多職種連携を学ぶ (各専門職学生による事例検討)		
	8	地域包括ケアと多職種連携 3	他学科の学生とのグループワークを通じて多職種連携を学ぶ (発表)		

[illegible]

授業科目	統計処理 A		担当教員	吉田 香織	
対象年次・学期	3 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	卒業研究に向けて、統計処理方法を学び、実践する。 プレゼンテーション技術の向上を目標とする。 最終的には、ツールを使用した効果的な発表方法を身につけ、卒業論文への足がかりとする。				
到達目標	・ Excel を用いた基本的な統計学的手法について実施できる。 ・ Powerpoint を用いたプレゼンテーションを作成することができる。				
テキスト・参考図書等	15 レクチャーシリーズ、リハビリテーション統計学 第 2 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	提出物にて評価する		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	100			
	その他	0			
履修上の留意事項	この科目で学んだことが卒業研究や臨床に活用できるように積極的に取り組んでください。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション、統計処理の実際 1（特性値の求め方）	オリエンテーション、特性値の算出方法について学ぶ		
	2	統計処理の実際 2（グラフ作成）	実際のデータを用いて、様々なグラフの作成方法について学ぶ		
	3	統計処理の実際 3（t 検定 1）	実際のデータを用いて、独立したサンプルの t 検定の手法、手順について理解する		
	4	統計処理の実際 4（t 検定 2）	実際のデータを用いて、対応のある t 検定の手法、手順について理解する		
	5	統計処理の実際 5（相関）	実際のデータを用いて、散布図の作成方法、相関係数の求め方について理解する		
	6	統計処理の実際 6（まとめ）	今まで履修した内容の演習問題を通して復習する		
	7	プレゼンテーション、資料作成 1	スライドの編集方法、様々なビジュアル効果の導入方法について理解する		
	8	プレゼンテーション、資料作成 2	実際に様々な効果を用いてプレゼンテーション資料を作成する		

[illegible]

授業科目	統計処理 B		担当教員	吉田 香織	
対象年次・学期	3 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	卒業研究に向けて統計処理方法を学び、実践する。 プレゼンテーション技術の向上を目標とする。 最終的には、ツールを使用した効果的な発表方法を身につけ、卒業論文への足がかりとする。				
到達目標	・ Excel を用いた基本的な統計学的手法について実施できる。 ・ Power Point を用いたプレゼンテーションを作成することができる。				
テキスト・参考図書等	15 レクチャーシリーズ、リハビリテーション統計学 第 2 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	提出物にて評価する		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	100			
	その他	0			
履修上の留意事項	この科目で学んだことが卒業研究や臨床に活用できるように積極的に取り組んでください。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション、統計処理の実際 1（特性値の求め方）	オリエンテーション、特性値の算出方法について学ぶ		
	2	統計処理の実際 2（グラフ作成）	オリエンテーション、特性値の算出方法について学ぶ		
	3	統計処理の実際 3（t 検定 1）	実際のデータを用いて、独立したサンプルの t 検定の手法、手順について理解する		
	4	統計処理の実際 4（t 検定 2）	実際のデータを用いて、対応のある t 検定の手法、手順について理解する		
	5	統計処理の実際 5（相関）	実際のデータを用いて、散布図の作成方法、相関係数の求め方について理解する		
	6	統計処理の実際 6（まとめ）	今まで履修した内容を演習問題を通して復習する		
	7	プレゼンテーション、資料作成 1	スライドの編集方法、様々なビジュアル効果の導入方法について理解する		
	8	プレゼンテーション、資料作成 2	実際に様々な効果を用いてプレゼンテーション資料を作成する		

[illegible]

授業科目	内部障害理学療法学実習 A		担当教員	横野 裕行	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数
授業目的	呼吸理学療法の基本から応用までを理解する。 循環器理学療法の基本から応用までを理解する				
到達目標	呼吸機能・循環機能障害について理解し、検査法および評価法・治療法を身につける。				
テキスト・参考図書等	フィジカルアセスメント完全攻略 Book 最新理学療法学講座 内部障害理学療法学 病気が見える 循環器 第 5 版 病気が見える 呼吸器 第 4 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	前期、後期試験共に合格すること 前期・後期の定期試験 100 点満点中 60 点以上を合格とし、本試験で 60 点に満たないものは再試験にて 60 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	解剖学や生理学などの基礎知識が重要な科目なので、十分復習して取り組むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション・循環器の解剖・生理学	オリエンテーション、解剖・生理学について復習をする		
	2	不整脈・心電図	不整脈に対する考え方・対応方法を学習する		
	3	不整脈・心電図	不整脈に対する考え方・対応方法を学習する		
	4	虚血性心疾患	心筋梗塞・狭心症の理学療法について学習する		
	5	虚血性心疾患	心筋梗塞・狭心症の理学療法について学習する		
	6	心不全	心不全の理学療法について学習する		
	7	心不全	心不全の理学療法について学習する		
	8	症例検討	心疾患の症例検討を実施する		
	9	運動耐容能	運動耐容能を評価する必要性を知る・運動処方の考え方を理解できる		
	10	大動脈疾患・末梢循環疾患	大動脈疾患・閉塞性動脈硬化症、深部静脈血栓症の理学療法について学習する		
	11	呼吸器疾患の病態と治療	呼吸器疾患の病態・治療法について学習する		
	12	呼吸器疾患の病態と治療	呼吸器疾患の病態・治療法について学習する		
	13	呼吸理学療法における評価	評価の手順目的を学習する。評価における理学所見の診察に関し、肺野と胸郭の位置関係を学習する		
	14	呼吸理学療法における評価	評価の手順目的を学習する。評価における理学所見の診察に関し、肺野と胸郭の位置関係を学習する		
	15	呼吸理学療法の手技	各手技の理論と実技を学習する。		
	16	呼吸理学療法の手技	各手技の理論と実技を学習する。		
	17	呼吸理学療法の手技	人工呼吸療法について学習する		
	18	呼吸理学療法の手技	人工呼吸療法について学習する		
	19	気管吸引について	気管吸引の実施、リスク管理について学習する		
	20	実際の呼吸器疾患に対する評価・治療について	代表的な呼吸器疾患の病態、理学療法評価、治療について学習する		
21	実際の呼吸器疾患に対する評価・治療について	代表的な呼吸器疾患の病態、理学療法評価、治療について学習する			

	22	悪性腫瘍	悪性腫瘍についての総論と理学療法
	23	悪性腫瘍	悪性腫瘍についての総論と理学療法

[illegible]

授業科目	内部障害理学療法学実習 B		担当教員	横野 裕行	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数 45 時間
授業目的	呼吸理学療法の基本から応用までを理解する。 循環器理学療法の基本から応用までを理解する				
到達目標	呼吸機能・循環機能障害について理解し、検査法および評価法・治療法を身につける。				
テキスト・参考図書等	フィジカルアセスメント完全攻略 Book 最新理学療法学講座 内部障害理学療法学 病気が見える 循環器 第 5 版 病気が見える 呼吸器 第 4 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	前期、後期試験共に合格すること 前期・後期の定期試験 100 点満点中 60 点以上を合格とし、本試験で 60 点に満たないものは再試験にて 60 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	解剖学や生理学などの基礎知識が重要な科目なので、十分復習して取り組むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション・循環器の解剖・生理学	オリエンテーション、解剖・生理学について復習をする		
	2	不整脈・心電図	不整脈に対する考え方・対応方法を学習する		
	3	不整脈・心電図	不整脈に対する考え方・対応方法を学習する		
	4	虚血性心疾患	心筋梗塞・狭心症の理学療法について学習する		
	5	虚血性心疾患	心筋梗塞・狭心症の理学療法について学習する		
	6	心不全	心不全の理学療法について学習する		
	7	心不全	心不全の理学療法について学習する		
	8	症例検討	心疾患の症例検討を実施する		
	9	運動耐容能	運動耐容能を評価する必要性を知る・運動処方の考え方を理解できる		
	10	大動脈疾患・末梢循環疾患	大動脈疾患・閉塞性動脈硬化症、深部静脈血栓症の理学療法について学習する		
	11	呼吸器疾患の病態と治療	呼吸器疾患の病態・治療法について学習する		
	12	呼吸器疾患の病態と治療	呼吸器疾患の病態・治療法について学習する		
	13	呼吸理学療法における評価	評価の手順目的を学習する。評価における理学所見の診察に関し、肺野と胸郭の位置関係を学習する		
	14	呼吸理学療法における評価	評価の手順目的を学習する。評価における理学所見の診察に関し、肺野と胸郭の位置関係を学習する		
	15	呼吸理学療法の手技	各手技の理論と実技を学習する。		
	16	呼吸理学療法の手技	各手技の理論と実技を学習する。		
	17	呼吸理学療法の手技	人工呼吸療法について学習する		
	18	呼吸理学療法の手技	人工呼吸療法について学習する		
	19	気管吸引について	気管吸引の実施、リスク管理について学習する		
	20	実際の呼吸器疾患に対する評価・治療について	代表的な呼吸器疾患の病態、理学療法評価、治療について学習する		
21	実際の呼吸器疾患に対する評価・治療について	代表的な呼吸器疾患の病態、理学療法評価、治療について学習する			

	22	悪性腫瘍	悪性腫瘍についての総論と理学療法
	23	悪性腫瘍	悪性腫瘍についての総論と理学療法

[illegible]

授業科目	日常生活活動 A	担当教員	竹中 謙将		
対象年次・学期	3 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	1・2 年次で履修した ADL ・ADL 実習を発展させ、臨床応用できるよう ADL に対するアプローチについて調べ・理解し、説明する機会を設けることで、学習する。				
到達目標	各疾患の特徴と環境に合わせた動作方法を検討できる。 患者を想定した状況で動作介助ができる。 車椅子処方ができる。				
テキスト・参考図書等	PT・OT ビジュアルテキスト ADL 姿勢と動作 第3 版 ADL その基礎から応用				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	筆記試験 70 点、実技試験 30 点の合計 100 点で評価する。60 点以上を合格とし、60 点に満たないものは再試験の筆記試験 100 点中 60 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	より実践的な ADL アプローチのためには、詳細な評価と具体的な生活のイメージが重要となる、そのことを念頭において学習を進めること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション			
	2	各疾患の ADL	各疾患の特徴と起居動作の方法をまとめ、発表する		
	3	各疾患の ADL	各疾患の特徴と起居動作の方法をまとめ、発表する		
	4	各疾患の ADL	各疾患の特徴と起居動作の方法をまとめ、発表する		
	5	各疾患の ADL	各疾患の特徴と起居動作の方法をまとめ、発表する		
	6	介助法の基本	介助の原則を学ぶ		
	7	介助法の基本	介助の原則を学ぶ		
	8	安全な介助法・工夫	片麻痺・対麻痺患者の ADL での介助法を学ぶ		
	9	安全な介助法・工夫	片麻痺・対麻痺患者の ADL での介助法を学ぶ		
	10	車椅子の基礎	車椅子の基礎について学ぶ		
	11	車椅子の基礎	車椅子の基礎について学ぶ		
	12	車椅子の採寸	車椅子の採寸方法のついて学ぶ		
	13	車椅子の採寸	車椅子の採寸方法のついて学ぶ		
	14	障害者スポーツ	障害者スポーツの紹介		
	15	障害者スポーツ	障害者スポーツの紹介		

授業科目	日常生活活動 A	担当 教員 実務 経験	梅田信吾 有：■ 無：□	道内の病院・障害者施設にて理学療法士として30年以上勤務
対象年次・学期	3年・前期	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	日常生活活動 B	担当教員	竹中 謙将		
対象年次・学期	3 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	1・2 年次で履修した ADL ・ADL 実習を発展させ、臨床応用できるよう ADL に対するアプローチについて調べ・理解し、説明する機会を設けることで、学習する。				
到達目標	各疾患の特徴と環境に合わせた動作方法を検討できる。 患者を想定した状況で動作介助ができる。 車椅子処方ができる。				
テキスト・参考図書等	PT・OT ビジュアルテキスト ADL 姿勢と動作 第3 版 ADL その基礎から応用				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	筆記試験 70 点、実技試験 30 点の合計 100 点で評価する。60 点以上を合格とし、60 点に満たないものは再試験の筆記試験 100 点中 60 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	より実践的な ADL アプローチのためには、詳細な評価と具体的な生活のイメージが重要となる、そのことを念頭において学習を進めること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション			
	2	各疾患の ADL	各疾患の特徴と起居動作の方法をまとめ、発表する		
	3	各疾患の ADL	各疾患の特徴と起居動作の方法をまとめ、発表する		
	4	各疾患の ADL	各疾患の特徴と起居動作の方法をまとめ、発表する		
	5	各疾患の ADL	各疾患の特徴と起居動作の方法をまとめ、発表する		
	6	介助法の基本	介助の原則を学ぶ		
	7	介助法の基本	介助の原則を学ぶ		
	8	安全な介助法・工夫	片麻痺・対麻痺患者の ADL での介助法を学ぶ		
	9	安全な介助法・工夫	片麻痺・対麻痺患者の ADL での介助法を学ぶ		
	10	車椅子の基礎	車椅子の基礎について学ぶ		
	11	車椅子の基礎	車椅子の基礎について学ぶ		
	12	車椅子の採寸	車椅子の採寸方法のついて学ぶ		
	13	車椅子の採寸	車椅子の採寸方法のついて学ぶ		
	14	障害者スポーツ	障害者スポーツの紹介		
	15	障害者スポーツ	障害者スポーツの紹介		

[illegible]

授業科目	発達障害理学療法学 A		担当教員	樋室 伸顕	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	発達障害児に対する理学療法の考え方、および療育における理学療法の役割を理解できる				
到達目標	1) 小児における理学療法評価の項目を列挙し説明できる。2) 正常発達の理解を基に異常運動発達を説明できる。3) 脳性麻痺のタイプ別特徴を理解し分類できる。4) 脳性麻痺における各種介入を理解し説明できる。5) 筋ジストロフィー症や染色体異常、小児整形外科疾患の特徴を理解し説明できる。				
テキスト・参考図書等	教科書 Crosslink 理学療法テキスト 小児理学療法学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	授業中の態度が不良な学生に対しては厳しい対応をする。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	発達障害理学療法総論（1）	発達障害と療育		
	2	発達障害理学療法総論（2）	エビデンスに基づいた臨床意思決定		
	3	正常発達と異常発達（1）	運動発達の捉え方		
	4	正常発達と異常発達（2）	赤ちゃんの運動発達		
	5	脳性麻痺とは	その臨床的特徴		
	6	脳性麻痺の理学療法（1）	理学療法評価のいとぐち		
	7	脳性麻痺の理学療法（2）	理学療法評価 - 1		
	8	脳性麻痺の理学療法（3）	理学療法評価 - 2		
	9	脳性麻痺の理学療法（4）	理学療法介入		
	10	脳性麻痺の理学療法（5）	理学療法の実際・まとめ		
	11	小児神経筋疾患	筋ジストロフィーに対する理学療法		
	12	小児神経筋疾患	筋ジストロフィーに対する理学療法		
	13	小児整形外科疾患	二分脊椎、ペルテス病等に対する理学療法		
	14	精神運動発達遅滞と染色体異常	ダウン症候群、発達障害等に対する理学療法		
	15	重症心身障害	重症心身障害に対する理学療法		

[illegible]

授業科目	発達障害理学療法学 B		担当教員	樋室 伸顕	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	発達障害児に対する理学療法の考え方、および療育における理学療法の役割を理解できる				
到達目標	1) 小児における理学療法評価の項目を列挙し説明できる。2) 正常発達の理解を基に異常運動発達を説明できる。3) 脳性麻痺のタイプ別特徴を理解し分類できる。4) 脳性麻痺における各種介入を理解し説明できる。5) 筋ジストロフィー症や染色体異常、小児整形外科疾患の特徴を理解し説明できる。				
テキスト・参考図書等	教科書 Crosslink 理学療法テキスト 小児理学療法学				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	授業中の態度が不良な学生に対しては厳しい対応をする。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	発達障害理学療法総論（1）	発達障害と療育		
	2	発達障害理学療法総論（2）	エビデンスに基づいた臨床意思決定		
	3	正常発達と異常発達（1）	運動発達の捉え方		
	4	正常発達と異常発達（2）	赤ちゃんの運動発達		
	5	脳性麻痺とは	その臨床的特徴		
	6	脳性麻痺の理学療法（1）	理学療法評価のいとぐち		
	7	脳性麻痺の理学療法（2）	理学療法評価 - 1		
	8	脳性麻痺の理学療法（3）	理学療法評価 - 2		
	9	脳性麻痺の理学療法（4）	理学療法介入		
	10	脳性麻痺の理学療法（5）	理学療法の実際・まとめ		
	11	小児神経筋疾患	筋ジストロフィーに対する理学療法		
	12	小児神経筋疾患	筋ジストロフィーに対する理学療法		
	13	小児整形外科疾患	二分脊椎、ペルテス病等に対する理学療法		
	14	精神運動発達遅滞と染色体異常	ダウン症候群、発達障害等に対する理学療法		
	15	重症心身障害	重症心身障害に対する理学療法		

[illegible]

授業科目	物理療法実習 A		担当教員	吉田 智子	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数
授業目的	各種物理療法についての定義、目的、効果と適応、実施方法、リスク管理など実習を通じて学ぶ。				
到達目標	各療法についての定義、目的、効果と適応、手段、リスク管理の学びを深める。 症状に対して適切な物理療法を選択できる。 安全に配慮し、適切な治療が実施できる。 研究方法を理解・実践し、結果を他者に伝えることができる。				
テキスト・参考図書等	最新理学療法学講座 物理療法学 医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	実習ごとのレポートをもって評価する。		
	レポート	100			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション、表在温熱療法	オリエンテーション。 表在温熱療法（ホットパック・パラフィン）の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。		
	2	表在温熱療法	表在温熱療法（ホットパック・パラフィン）の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	3	電磁波療法・超音波療法	電磁波療法、超音波療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	4	電磁波療法・超音波療法	電磁波療法、超音波療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	5	電磁波療法・超音波療法	電磁波療法、超音波療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	6	電磁波療法・超音波療法	電磁波療法、超音波療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	7	電気刺激療法	電気刺激療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	8	電気刺激療法	電気刺激療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	9	光線療法・牽引療法	光線療法・牽引療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	10	光線療法・牽引療法	光線療法・牽引療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	11	水治療法・寒冷療法	水治療法・寒冷療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		

	12	水治療法・寒冷療法	水治療法・寒冷療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。
	13	水治療法・寒冷療法	水治療法・寒冷療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。
	14	水治療法・寒冷療法	水治療法・寒冷療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。
	15	物理療法に関する先行研究を調べ理解する	先行研究を読み込み、実施手順などを確認する
	16	物理療法に関する先行研究を読み、実践する	先行研究の記載に沿って予備実験（パイロット研究）を行い、詳細な実験手順を確認する
	17	実験	先行研究を模倣し、実験する
	18	実験	先行研究を模倣し、実験する
	19	実験、データまとめ、レポート作成	先行研究を模倣し、実験する 実験結果をまとめ、レポートを作成する プレゼン資料を作成する
	20	実験、データまとめ、レポート作成	先行研究を模倣し、実験する 実験結果をまとめ、レポートを作成する プレゼン資料を作成する
	21	実験、データまとめ、レポート作成	先行研究を模倣し、実験する 実験結果をまとめ、レポートを作成する プレゼン資料を作成する
	22	実験、データまとめ、レポート作成	先行研究を模倣し、実験する 実験結果をまとめ、レポートを作成する プレゼン資料を作成する
	23	実験結果の報告	小グループに分かれ、実験結果をプレゼンする

授業科目	物理療法実習 A	担当 教員 実務 経験	吉田 智子 有：■ 無：□	市内整形外科で理学療法士として 10 年以上勤務
対象年次・学期	3 年・通年	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	物理療法実習 B		担当教員	吉田 智子	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	23 回	時間数
授業目的	各種物理療法についての定義、目的、効果と適応、実施方法、リスク管理など実習を通じて学ぶ。				
到達目標	各療法についての定義、目的、効果と適応、手段、リスク管理の学びを深める。 症状に対して適切な物理療法を選択できる。 安全に配慮し、適切な治療が実施できる。 研究方法を理解・実践し、結果を他者に伝えることができる。				
テキスト・参考図書等	最新理学療法学講座 物理療法学 医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	実習ごとのレポートをもって評価する。		
	レポート	100			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション、表在温熱療法	オリエンテーション。 表在温熱療法（ホットパック・パラフィン）の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。		
	2	表在温熱療法	表在温熱療法（ホットパック・パラフィン）の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	3	電磁波療法・超音波療法	電磁波療法、超音波療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	4	電磁波療法・超音波療法	電磁波療法、超音波療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	5	電磁波療法・超音波療法	電磁波療法、超音波療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	6	電磁波療法・超音波療法	電磁波療法、超音波療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	7	電気刺激療法	電気刺激療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	8	電気刺激療法	電気刺激療法生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	9	光線療法・牽引療法	光線療法・牽引療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	10	光線療法・牽引療法	光線療法・牽引療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		
	11	水治療法・寒冷療法	水治療法・寒冷療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。		

	12	水治療法・寒冷療法	水治療法・寒冷療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。
	13	水治療法・寒冷療法	水治療法・寒冷療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。
	14	水治療法・寒冷療法	水治療法・寒冷療法の生理学的効果・適当と禁忌について確認し、生理学的効果を検証する。 レポートにまとめ、報告する。
	15	物理療法に関する先行研究を調べ理解する	先行研究を読み込み、実施手順などを確認する
	16	物理療法に関する先行研究を読み、実践する	先行研究の記載に沿って予備実験（パイロット研究）を行い、詳細な実験手順を確認する
	17	実験	先行研究を模倣し、実験する
	18	実験	先行研究を模倣し、実験する
	19	実験、データまとめ、レポート作成	先行研究を模倣し、実験する 実験結果をまとめ、レポートを作成する プレゼン資料を作成する
	20	実験、データまとめ、レポート作成	先行研究を模倣し、実験する 実験結果をまとめ、レポートを作成する プレゼン資料を作成する
	21	実験、データまとめ、レポート作成	先行研究を模倣し、実験する 実験結果をまとめ、レポートを作成する プレゼン資料を作成する
	22	実験、データまとめ、レポート作成	先行研究を模倣し、実験する 実験結果をまとめ、レポートを作成する プレゼン資料を作成する
	23	実験結果の報告	小グループに分かれ、実験結果をプレゼンする

[illegible]

授業科目	薬理学 A		担当教員	竹本 功	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	患者の QOL 改善には職能間での情報交換が必要であり、特に医薬品の関与が欠かせず、その基本的な知識により幅広い情報提供ができること。				
到達目標	1) 医療人として、医薬品の重要性を理解すること。 2) チーム医療の一員として、主な医薬品の主作用と副作用、取扱い、薬物療法の習得をすること。				
テキスト・参考図書等	わかりやすい 薬理学 第4版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験において、100 点満点中 60 点以上が合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	2 コマ単位で授業を進行する。講義終了 5～10 分前に復習を行う。特に、総論・末梢神経作用薬・中枢神経作用薬・抗炎症薬・ホルモン系作用薬・抗感染症薬を中心に講義をする。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	総論（1）	薬理学の概念、主作用と副作用、薬物動態と薬効		
	2	総論（2）	小児・妊婦・高齢者の薬物治療、医薬品の規制と保管・管理		
	3	末梢神経作用薬、中枢神経作用薬	自律神経作用薬、筋弛緩薬、局所麻酔薬、全身麻酔薬、麻薬性鎮痛薬、鎮静睡眠薬		
	4	中枢神経作用薬、循環器系作用薬	向精神薬、抗てんかん薬、抗パーキンソン病薬、降圧薬、心臓作用薬、腎臓作用薬		
	5	循環器系作用薬、抗炎症薬	血液造血器系作用薬、非ステロイド性消炎鎮痛薬、その他		
	6	呼吸器系作用薬、消化器系作用薬	気管支喘息治療薬、鎮咳薬、胃炎・抗消化性潰瘍薬、催吐薬・制吐薬、催下薬		
	7	ホルモン系作用薬、抗感染症薬	糖尿病治療薬、骨粗鬆症治療薬、抗菌薬		
	8	消毒薬・抗がん剤、補習	種類と使用方法・抗がん剤、プリント・スライド		

[illegible]

授業科目	薬理学 B		担当教員	竹本 功	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	患者の QOL 改善には職能間での情報交換が必要であり、特に医薬品の関与が欠かせず、その基本的な知識により幅広い情報提供ができること。				
到達目標	1) 医療人として、医薬品の重要性を理解すること。 2) チーム医療の一員として、主な医薬品の主作用と副作用、取扱い、薬物療法の習得をすること。				
テキスト・参考図書等	わかりやすい 薬理学 第 4 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験において、100 点満点中 60 点以上が合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	2 コマ単位で授業を進行する。講義終了 5～10 分前に復習を行う。特に、総論・末梢神経作用薬・中枢神経作用薬・抗炎症薬・ホルモン系作用薬・抗感染症薬を中心に講義をする。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	総論（1）	薬理学の概念、主作用と副作用、薬物動態と薬効		
	2	総論（2）	小児・妊婦・高齢者の薬物治療、医薬品の規制と保管・管理		
	3	末梢神経作用薬、中枢神経作用薬	自律神経作用薬、筋弛緩薬、局所麻酔薬、全身麻酔薬、麻薬性鎮痛薬、鎮静睡眠薬		
	4	中枢神経作用薬、循環器系作用薬	向精神薬、抗てんかん薬、抗パーキンソン病薬、降圧薬、心臓作用薬、腎臓作用薬		
	5	循環器系作用薬、抗炎症薬	血液造血器系作用薬、非ステロイド性消炎鎮痛薬、その他		
	6	呼吸器系作用薬、消化器系作用薬	気管支喘息治療薬、鎮咳薬、胃炎・抗消化性潰瘍薬、催吐薬・制吐薬、催下薬		
	7	ホルモン系作用薬、抗感染症薬	糖尿病治療薬、骨粗鬆症治療薬、抗菌薬		
	8	消毒薬・抗がん剤、補習	種類と使用方法・抗がん剤、プリント・スライド		

[illegible]

授業科目	理学療法概論 A		担当教員	吉田 香織	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	・理学療法士に求められる資質について再考し、自らの課題を確認する。理学療法を実施する上で必要な公衆衛生の概念や医療安全、リスク管理、関連法規、記録、等について学ぶ。				
到達目標	・理学療法に必要な公衆衛生の概念や医療安全、リスク管理、関連法規、記録、等について理解を深め、臨床での実践につなげる。				
テキスト・参考図書等	公衆衛生がみえる 第 6 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	履修した内容を単なる知識と捉えるのではなく、今後、自分が「どのような姿勢で臨床に臨むか」を考えること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション、「2年間の振り返りと今後に向けて」、PT の資質とは 1	授業オリエンテーション グループ討議		
	2	PT の資質とは 2	グループ討議・発表		
	3	公衆衛生、健康、予防医学の概念と理学療法	公衆衛生、健康の概念、予防医学の概念について学ぶ		
	4	医療の質と安全の確保 1	医療の質の評価、リスクについて学習する		
	5	医療の質と安全の確保 2	医療の場面でのリスクマネジメントについて学習する		
	6	医療の質と安全の確保 3	感染予防、感染対策について学習する		
	7	診療報酬・診療記録・関連法規	診療報酬、診療記録と関連する法律について学ぶ		
8	医の倫理と患者の人権 インフォームド・コンセント	理学療法士の倫理と患者の人権の尊重、インフォームド・コンセントについて学ぶ			

[illegible]

授業科目	理学療法概論 B		担当教員	吉田 香織	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	8 回	時間数
授業目的	・理学療法士に求められる資質について再考し、自らの課題を確認する。理学療法を実施する上で必要な公衆衛生の概念や医療安全、リスク管理、関連法規、記録、等について学ぶ。				
到達目標	・理学療法に必要な公衆衛生の概念や医療安全、リスク管理、関連法規、記録、等について理解を深め、臨床での実践につなげる。				
テキスト・参考図書等	公衆衛生がみえる 第 6 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	履修した内容を単なる知識と捉えるのではなく、今後、自分が「どのような姿勢で臨床に臨むか」を考えること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション、「2 年間の振り返りと今後に向けて」、PT の資質とは 1	授業オリエンテーション グループ討議		
	2	PT の資質とは 2	グループ討議・発表		
	3	公衆衛生、健康、予防医学の概念と理学療法	公衆衛生、健康の概念、予防医学の概念について学ぶ		
	4	医療の質と安全の確保 1	医療の質の評価、リスクについて学習する		
	5	医療の質と安全の確保 2	医療の場面でのリスクマネジメントについて学習する		
	6	医療の質と安全の確保 3	感染予防、感染対策について学習する		
	7	診療報酬・診療記録・関連法規	診療報酬、診療記録と関連する法律について学ぶ		
8	医の倫理と患者の人権 インフォームド・コンセント	理学療法士の倫理と患者の人権の尊重、インフォームド・コンセントについて学ぶ			

授業科目	理学療法概論 B	担当 教員 実務 経験	吉田香織 有：■ 無：□	道内の総合病院に理学療法士として 10 年以上勤務
対象年次・学期	3 年・前期	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	理学療法研究法 A		担当教員	吉田 香織	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	・ 理学療法研究法 から発展させ、理学療法における研究法の概要を学び卒業研究に活かす。 ・ また研究を進めたり論文を理解するために不可欠な統計学の知識についても学習する。				
到達目標	・ 研究を進める上で必要な基礎知識について学び理解を深める ・ 文献検索、研究計画の立て方、データ収集と解析の仕方、論文の書き方・発表の仕方等について学び理解する。 ・ 統計学的手法について学び活用できるようになる				
テキスト・参考図書等	最新理学療法学講座 理学療法研究法 公衆衛生がみえる 第 5 版 15 レクチャーシリーズリハビリテーションテキスト リハビリテーション統計学 第 2 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	研究手法について学習することは、文献の知識を活用し臨床に役立てることに繋がります。暗記ではなく理解することを心がけてください。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション、研究とは、研究デザインの基礎	オリエンテーション、研究の意義、概要、研究の流れ、研究デザインの基礎について理解する		
	2	論文の種類と構成	論文の種類、構成について学習する		
	3	卒業研究発表の聴講	卒業研究発表会を聴講し、発表方法の概要について理解する		
	4	文献検索・文献の読み方 1	文献検索の方法について学び、文献の批判的精読を行う		
	5	研究計画の立て方 1	研究テーマの見つけ方、計画の立て方、研究計画書の内容について理解する		
	6	文献検索・文献の読み方 2	文献検索の方法について学び、文献の批判的精読を行う。先行研究のまとめ方について理解する		
	7	EBM	EBM の概要と手法について学ぶ		
	8	研究計画の立て方 2	信頼性・妥当性、バイアスとは何か学ぶ。		
	9	研究計画の立て方 3	文献の記載の仕方、バイアス対策、権者内信頼性・検者間信頼性、パイロットスタディについて学ぶ		
	10	インフォームド・コンセント	ヘルシンキ宣言、インフォームドコンセントの意義と内容について理解し、研究対象者への説明方法を考える		
	11	統計学的解析の進め方 1	データの尺度・特性値・グラフについて理解する		
	12	統計学的解析の進め方 2	差の検定を中心に、推定と検定の基礎について学ぶ		
	13	統計学的解析の進め方 3	ノンパラメトリック検定の基礎について学ぶ		
	14	統計学的解析の進め方 4	実際にどのような統計手法を用いるか、選定の流れについて理解する		

授業科目	理学療法研究法 B		担当教員	吉田 香織	
対象年次・学期	3 年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	・ 理学療法研究法 から発展させ、理学療法における研究法の概要を学び卒業研究に活かす。 ・ また研究を進めたり論文を理解するために不可欠な統計学の知識についても学習する。				
到達目標	・ 研究を進める上で必要な基礎知識について学び理解を深める ・ 文献検索、研究計画の立て方、データ収集と解析の仕方、論文の書き方・発表の仕方等について学び理解する。 ・ 統計学的手法について学び活用できるようになる				
テキスト・参考図書等	最新理学療法学講座 理学療法研究法 公衆衛生がみえる 第 5 版 15 レクチャーシリーズリハビリテーションテキスト リハビリテーション統計学 第 2 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	研究手法について学習することは、文献の知識を活用し臨床に役立てることに繋がります。暗記ではなく理解することを心がけてください。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション、研究とは、研究デザインの基礎	オリエンテーション、研究の意義、概要、研究の流れ、研究デザインの基礎について理解する		
	2	論文の種類と構成	論文の種類、構成について学習する		
	3	卒業研究発表の聴講	卒業研究発表会を聴講し、発表方法の概要について理解する		
	4	文献検索・文献の読み方 1	文献検索の方法について学び、文献の批判的精読を行う		
	5	研究計画の立て方 1	研究テーマの見つけ方、計画の立て方、研究計画書の内容について理解する		
	6	文献検索・文献の読み方 2	文献検索の方法について学び、文献の批判的精読を行う。先行研究のまとめ方について理解する		
	7	EBM	EBM の概要と手法について学ぶ		
	8	研究計画の立て方 2	信頼性・妥当性、バイアスとは何か学ぶ。		
	9	研究計画の立て方 3	文献の記載の仕方、バイアス対策、権者内信頼性・検者間信頼性、パイロットスタディについて学ぶ		
	10	インフォームド・コンセント	ヘルシンキ宣言、インフォームドコンセントの意義と内容について理解し、研究対象者への説明方法を考える		
	11	統計学的解析の進め方 1	データの尺度・特性値・グラフについて理解する		
	12	統計学的解析の進め方 2	差の検定を中心に、推定と検定の基礎について学ぶ		
	13	統計学的解析の進め方 3	ノンパラメトリック検定の基礎について学ぶ		
	14	統計学的解析の進め方 4	実際にどのような統計手法を用いるか、選定の流れについ		

			で理解する
	15	統計学的解析の進め方 5	診断・検査の指標（感度、特異度）について学ぶ

授業科目	理学療法研究法 B	担当 教員 実務 経験	吉田香織 有：■ 無：□	道内の総合病院に理学療法士として 10 年以上勤務
対象年次・学期	3 年・通年	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	理学療法評価法 A		担当教員	武田 祐貴	
対象年次・学期	3年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	・理学療法評価に必要な検査・測定手技の正確性、迅速性、再現性を養い、これまでに学習した評価法の知識・技術を確実なものとする。 ・理学療法評価の臨床応用の方法について学ぶ。 ・得られた理学療法評価の結果を治療に結びつけるための思考過程を学ぶ。				
到達目標	・代表的な疾患に対する理学療法評価の臨床応用について学び、治療に結びつけるための思考過程と実践能力を身につける。				
テキスト・参考図書等	PT・OTのための臨床技能とOSCE コミュニケーションと介助・検査測定編 第2版補訂 PT・OTのための臨床技能とOSCE 機能障害・能力低下への介入編 理学療法評価学 改訂第6版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	実技試験において、100点満点中60点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・事前に必要な知識について復習をして臨むこと。 ・授業は動きやすい、実習がしやすい格好で臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	脳血管疾患の評価と介助、治療	主に脳卒中片麻痺患者の評価、介助における臨床応用の方法に関する実技 得られた評価結果を治療につなげるための思考過程の学習		
	2	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	3	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	4	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	5	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	6	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	7	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	8	運動器疾患の評価と介助、治療	運動器疾患の評価、介助における臨床応用の方法に関する実技 得られた評価結果を治療につなげるための思考過程の学習		
	9	運動器疾患の評価と介助、治療			
	10	運動器疾患の評価と介助、治療			
	11	運動器疾患の評価と介助、治療			
	12	運動器疾患の評価と介助、治療			
	13	運動器疾患の評価と介助、治療			
	14	運動器疾患の評価と介助、治療			
	15	まとめ			

[illegible]

授業科目	理学療法評価法 B		担当教員	武田 祐貴	
対象年次・学期	3年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数
授業目的	・理学療法評価に必要な検査・測定手技の正確性、迅速性、再現性を養い、これまでに学習した評価法の知識・技術を確実なものとする。 ・理学療法評価の臨床応用の方法について学ぶ。 ・得られた理学療法評価の結果を治療に結びつけるための思考過程を学ぶ。				
到達目標	・代表的な疾患に対する理学療法評価の臨床応用について学び、治療に結びつけるための思考過程と実践能力を身につける。				
テキスト・参考図書等	PT・OTのための臨床技能とOSCE コミュニケーションと介助・検査測定編 第2版補訂 PT・OTのための臨床技能とOSCE 機能障害・能力低下への介入編 理学療法評価学 改訂第6版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	実技試験において、100点満点中60点以上が合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	・事前に必要な知識について復習をして臨むこと。 ・授業は動きやすい、実習がしやすい格好で臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	脳血管疾患の評価と介助、治療	主に脳卒中片麻痺患者の評価、介助における臨床応用の方法に関する実技 得られた評価結果を治療につなげるための思考過程の学習		
	2	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	3	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	4	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	5	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	6	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	7	脳血管疾患の評価と介助、治療			
	8	運動器疾患の評価と介助、治療	運動器疾患の評価、介助における臨床応用の方法に関する実技 得られた評価結果を治療につなげるための思考過程の学習		
	9	運動器疾患の評価と介助、治療			
	10	運動器疾患の評価と介助、治療			
	11	運動器疾患の評価と介助、治療			
	12	運動器疾患の評価と介助、治療			
	13	運動器疾患の評価と介助、治療			
	14	運動器疾患の評価と介助、治療			
	15	まとめ			

[illegible]

授業科目	倫理学 A		担当教員	尾形 敬次	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数 30 時間
授業目的	近年では健康保険制度の改革が問題になり、特にその一般的な政策である構造改革の理解にまで立ち入る必要があった。この種の問題は医療システムと直接的な関係と緊急性があるので、相応の時間を取って理解を深めてもらう。そこで最新の社会現象について、随時考察を試みてもらう。この考察の結果を授業にフィードバックさせる。これは状況の変化に対応させるため、前もってシラバスの中で予告することはできない。以上のように、学生の習熟度と社会状況の関係の中で講義を進めるので、時間ごとの講義内容をシラバスであらかじめ指示することはできず、下はあくまで目安となる講義計画である。知識として習得すべき内容はほぼ以下の通りであり、講義はおおむねこの順序に沿って進められるが、テーマによっては数時間かけて議論する。				
到達目標	この講義は医療者としての態度を形成することが目標である。したがって、倫理的議論の知識を持つべきことは無論のこと、それを通して何よりもまず、医療者としての社会的、道徳的立場を確立することが目標となる。認識すべき重要なことは、他人の生命、健康を左右するため、医療者としての責任は、他の職種よりも大きいことである。つまり、一般の大人以上の高い道徳性が医療者には求められる。従って、他の講義とは異なり、ここでは知識の習得ばかりでなく、道徳的態度の確立が優先課題となる。一方、医療を巡る社会状況はめまぐるしく変化する場合がある。その変化の中でも医療者としての自分の立場を確立することがこの授業の目標である。				
テキスト・参考図書等	特に指定しない				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	授業時間に提起する課題と期末試験の総合		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	50			
	その他	0			
履修上の留意事項	ノートを取ること 講義の中では講義ばかりでなく、その態度の確立に関与する問いを立て、随時考察してもらう。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	民主主義社会	民主主義社会の主旨、制度の認識		
	2	民主主義社会	民主主義社会の主旨、制度の認識		
	3	福祉社会	社会福祉の理念と実際を知ること		
	4	生命倫理学	1．医療を巡る社会背景、2．医療を巡る第二次大戦後の変化、3．Cure から Care へ、4．患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5．脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6．再生的クローンと治療的クローン、7．尊厳死と安楽死、8．生命と人間の尊厳		
	5	生命倫理学	1．医療を巡る社会背景、2．医療を巡る第二次大戦後の変化、3．Cure から Care へ、4．患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5．脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6．再生的クローンと治療的クローン、7．尊厳死と安楽死、8．生命と人間の尊厳		
	6	生命倫理学	1．医療を巡る社会背景、2．医療を巡る第二次大戦後の変化、3．Cure から Care へ、4．患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5．脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6．再生的クローンと治療的クローン、7．尊厳死と安楽死、8．生命と人間の尊厳		
7	生命倫理学	1．医療を巡る社会背景、2．医療を巡る第二次大戦後の変化、3．Cure から Care へ、4．患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5．脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6．再生的クローンと治療的クローン、7．尊厳死と安楽死、8．生命と人間の尊厳			

	8	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	9	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	10	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	11	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	12	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	13	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	14	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	15	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳

[illegible]

授業科目	倫理学 B		担当教員	尾形 敬次	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	近年では健康保険制度の改革が問題になり、特にその一般的な政策である構造改革の理解にまで立ち入る必要があった。この種の問題は医療システムと直接的な関係と緊急性があるので、相応の時間を取って理解を深めてもらう。そこで最新の社会現象について、随時考察を試みてもらう。この考察の結果を授業にフィードバックさせる。これは状況の変化に対応させるため、前もってシラバスの中で予告することはできない。以上のように、学生の習熟度と社会状況の関係の中で講義を進めるので、時間ごとの講義内容をシラバスであらかじめ指示することはできず、下はあくまで目安となる講義計画である。知識として習得すべき内容はほぼ以下の通りであり、講義はおおむねこの順序に沿って進められるが、テーマによっては数時間かけて議論する。				
到達目標	この講義は医療者としての態度を形成することが目標である。したがって、倫理的議論の知識を持つべきことは無論のこと、それを通して何よりもまず、医療者としての社会的、道徳的立場を確立することが目標となる。認識すべき重要なことは、他人の生命、健康を左右するため、医療者としての責任は、他の職種よりも大きいことである。つまり、一般の大人以上の高い道徳性が医療者には求められる。従って、他の講義とは異なり、ここでは知識の習得ばかりでなく、道徳的態度の確立が優先課題となる。一方、医療を巡る社会状況はめまぐるしく変化する場合がある。その変化の中でも医療者としての自分の立場を確立することがこの授業の目標である。				
テキスト・参考図書等	特に指定しない				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	授業時間に提起する課題と期末試験の総合		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	50			
	その他	0			
履修上の留意事項	ノートを取ること 講義の中では講義ばかりでなく、その態度の確立に関与する問いを立て、随時考察してもらう。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	民主主義社会	民主主義社会の主旨、制度の認識		
	2	民主主義社会	民主主義社会の主旨、制度の認識		
	3	福祉社会	社会福祉の理念と実際を知ること		
	4	生命倫理学	1．医療を巡る社会背景、2．医療を巡る第二次大戦後の変化、3．Cure から Care へ、4．患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5．脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6．再生的クローンと治療的クローン、7．尊厳死と安楽死、8．生命と人間の尊厳		
	5	生命倫理学	1．医療を巡る社会背景、2．医療を巡る第二次大戦後の変化、3．Cure から Care へ、4．患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5．脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6．再生的クローンと治療的クローン、7．尊厳死と安楽死、8．生命と人間の尊厳		
	6	生命倫理学	1．医療を巡る社会背景、2．医療を巡る第二次大戦後の変化、3．Cure から Care へ、4．患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5．脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6．再生的クローンと治療的クローン、7．尊厳死と安楽死、8．生命と人間の尊厳		
	7	生命倫理学	1．医療を巡る社会背景、2．医療を巡る第二次大戦後の変化、3．Cure から Care へ、4．患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5．脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6．再生的クローンと治療的クローン、7．尊厳死と安楽死、8．生命と人間の尊厳		
	8	生命倫理学	1．医療を巡る社会背景、2．医療を巡る第二次大戦後の変化、3．Cure から Care へ、4．患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5．脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6．再生的クローンと治療的クローン、7．尊厳死と		

			安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	9	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	10	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	11	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	12	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	13	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	14	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳
	15	生命倫理学	1. 医療を巡る社会背景、2. 医療を巡る第二次大戦後の変化、3. Cure から Care へ、4. 患者の自己決定権とインフォームド・コンセント、5. 脳死臓器移植と生命倫理学的問題、6. 再生的クローンと治療的クローン、7. 尊厳死と安楽死、8. 生命と人間の尊厳

[illegible]

授業科目	臨床実習 A		担当教員	横野 裕行	
対象年次・学期	3 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	180 回	時間数 360 時間
授業目的	総合的な臨床実習の初段階であり、対象者の評価から治療までの一連の理学療法プロセスを臨床参加型の実習において学習する。また、病院等の組織をはじめリハビリテーション・チームの一員としての運営・管理について学ぶ。				
到達目標	a) 対象者の情報収集と検査・測定を迅速に実施できる。 b) 収集したデータを統合・解釈し、問題点に対するゴールを立案する。 c) 症例の社会的背景を踏まえ総合的な視点から考察する。 d) ゴールに対する理学療法プログラムを作成し実施する。 e) 理学療法の基本的な原理を把握し、治療技術を実際に行い再評価を行うことで対象者の変化を把握し、その理由を考察する。				
テキスト・参考図書等	臨床実習教育の手引き 第 6 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	臨床実習指導者の評定、実習報告会の発表内容等を併せ、総合的に評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
	その他	80			
履修上の留意事項	はじめての長期の総合臨床実習なので、真摯な気持ちで患者さんと接し協力していただいている患者さんのために何ができるかよく考えて行動すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	【第 1-10 回】 1．実習前評価	実習前筆記・実技試験にて、直接対象者に接するに当たり、総合的知識及び基本的技能・態度を備えていることを確認する。		
	2	【第 11-165 回】 2．臨床実習	各実習施設に赴き実習指導者の指示のもと、評価から治療までの一連の流れを臨床参加型の実習を通して学ぶ。また、病院等の組織をはじめリハビリテーション・チームの一員としての運営・管理について学ぶ。		
	3	【第 166-180 回】 3．実習後評価	実習における教育成果の判定には実習報告会の内容や提出物等について確認し、実習指導者評価を参考に総合的に判定する。		

[illegible]

授業科目	臨床実習 B		担当教員	横野 裕行	
対象年次・学期	3 年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	180 回	時間数 360 時間
授業目的	総合的な臨床実習の初段階であり、対象者の評価から治療までの一連の理学療法プロセスを臨床参加型の実習において学習する。また、病院等の組織をはじめリハビリテーション・チームの一員としての運営・管理について学ぶ。				
到達目標	a) 対象者の情報収集と検査・測定を迅速に実施できる。 b) 収集したデータを統合・解釈し、問題点に対するゴールを立案する。 c) 症例の社会的背景を踏まえ総合的な視点から考察する。 d) ゴールに対する理学療法プログラムを作成し実施する。 e) 理学療法の基本的な原理を把握し、治療技術を実際に行い再評価を行うことで対象者の変化を把握し、その理由を考察する。				
テキスト・参考図書等	臨床実習教育の手引き 第 6 版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	臨床実習指導者の評定、実習報告会の発表内容等を併せ、総合的に評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
	その他	80			
履修上の留意事項	はじめての長期の総合臨床実習なので、真摯な気持ちで患者さんと接し協力していただいている患者さんのために何ができるかよく考えて行動すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	【第 1-10 回】 1．実習前評価	実習前筆記・実技試験にて、直接対象者に接するに当たり、総合的知識及び基本的技能・態度を備えていることを確認する。		
	2	【第 11-165 回】 2．臨床実習	各実習施設に赴き実習指導者の指示のもと、評価から治療までの一連の流れを臨床参加型の実習を通して学ぶ。また、病院等の組織をはじめリハビリテーション・チームの一員としての運営・管理について学ぶ。		
	3	【第 166-180 回】 3．実習後評価	実習における教育成果の判定には実習報告会の内容や提出物等について確認し、実習指導者評価を参考に総合的に判定する。		

[illegible]

授業科目	老年期理学療法学 A		担当教員	横野 裕行	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	高齢者に対する理学療法に必要なリスク管理を理解するために、高齢者の身体機能・心理の特徴、高齢者に多い疾患を理解し臨床的应用について学ぶ。				
到達目標	・加齢による身体的、心理社会的変化について学習する。 ・加齢による諸変化（身体的、心理社会的）について説明できる。 ・加齢が運動機能に及ぼす影響について説明できる。 ・高齢者に対する安全で効果的な理学療法について説明できる。				
テキスト・参考図書等	なし				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験 100 点満点中 60 点以上を合格とし、本試験で 60 点に満たないものは再試験にて 60 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	高齢者に生じる様々な特徴を理解するために、生理学をはじめ、1、2 年次に学習したことを各自振り返ること				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション・高齢者とは～グループワーク～	オリエンテーション、「高齢者」についてグループで学習する		
	2	高齢者とは ～グループワーク～	「高齢者」についてグループで学習する		
	3	高齢者とは ～発表～	「高齢者」についてグループで発表する		
	4	高齢者の疫学と PT の関わり・加齢による身体の変化	我が国の高齢者の状況・環境を知る 理学療法士は高齢者に何ができるのか考える 加齢により、生理的・身体的にどのような変化が生じるかを学ぶ		
	5	加齢による身体の変化	加齢により、生理的・身体的にどのような変化が生じるかを学ぶ 加齢により、機能面・認知機能にどのような変化が生じるかを学ぶ		
	6	老年症候群	老年症候群の概念、代表的な老年症候群について理解する フレイル・サルコペニア・低栄養について学ぶ		
	7	老年症候群 ～体験～	フレイル・サルコペニア・低栄養について、検査・評価を経験する		
	8	老年症候群 ～体験～	フレイル・サルコペニア・低栄養について、検査・評価を経験する		
	9	老年症候群	転倒・廃用症候群について理解する		
	10	高齢者に特徴的な疾患	高齢者に特徴的な骨・運動器疾患、ロコモ・運動器不安定症について学ぶ		
	11	高齢者に特徴的な疾患 ～体験～	ロコモ・運動器不安定症について、検査・評価を経験する		
	12	高齢者に特徴的な疾患	高齢者に特徴的な呼吸・循環器・神経疾患について学ぶ		
	13	高齢者に特徴的な疾患	高齢者に特徴的な消化器疾患・外科的治療について学ぶ		
	14	高齢者の退院支援・地域リハ 最終段階における医療	高齢者の取りまく環境や、人生の最終段階における医療やケアを学ぶ		
	15	老年症候群に対する症例検討	症例検討を実施し、議論することで理学療法のイメージを醸成する。		

[illegible]

授業科目	老年期理学療法学 B		担当教員	横野 裕行	
対象年次・学期	3 年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15 回	時間数
授業目的	高齢者に対する理学療法に必要なリスク管理を理解するために、高齢者の身体機能・心理の特徴、高齢者に多い疾患を理解し臨床的应用について学ぶ。				
到達目標	・加齢による身体的、心理社会的変化について学習する。 ・加齢による諸変化（身体的、心理社会的）について説明できる。 ・加齢が運動機能に及ぼす影響について説明できる。 ・高齢者に対する安全で効果的な理学療法について説明できる。				
テキスト・参考図書等	なし				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験 100 点満点中 60 点以上を合格とし、本試験で 60 点に満たないものは再試験にて 60 点以上を合格とする。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	高齢者に生じる様々な特徴を理解するために、生理学をはじめ、1、2 年次に学習したことを各自振り返ること				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション・高齢者とは～グループワーク～	オリエンテーション、「高齢者」についてグループで学習する		
	2	高齢者とは ～グループワーク～	「高齢者」についてグループで学習する		
	3	高齢者とは ～発表～	「高齢者」についてグループで発表する		
	4	高齢者の疫学と PT の関わり・加齢による身体の変化	我が国の高齢者の状況・環境を知る 理学療法士は高齢者に何ができるのか考える 加齢により、生理的・身体的にどのような変化が生じるかを学ぶ		
	5	加齢による身体の変化	加齢により、生理的・身体的にどのような変化が生じるかを学ぶ 加齢により、機能面・認知機能にどのような変化が生じるかを学ぶ		
	6	老年症候群	老年症候群の概念、代表的な老年症候群について理解する フレイル・サルコペニア・低栄養について学ぶ		
	7	老年症候群 ～体験～	フレイル・サルコペニア・低栄養について、検査・評価を経験する		
	8	老年症候群 ～体験～	フレイル・サルコペニア・低栄養について、検査・評価を経験する		
	9	老年症候群	転倒・廃用症候群について理解する		
	10	高齢者に特徴的な疾患	高齢者に特徴的な骨・運動器疾患、ロコモ・運動器不安定症について学ぶ		
	11	高齢者に特徴的な疾患 ～体験～	ロコモ・運動器不安定症について、検査・評価を経験する		
	12	高齢者に特徴的な疾患	高齢者に特徴的な呼吸・循環器・神経疾患について学ぶ		
	13	高齢者に特徴的な疾患	高齢者に特徴的な消化器疾患・外科的治療について学ぶ		
	14	高齢者の退院支援・地域リハ 最終段階における医療	高齢者の取りまく環境や、人生の最終段階における医療やケアを学ぶ		
	15	老年症候群に対する症例検討	症例検討を実施し、議論することで理学療法のイメージを醸成する。		

[illegible]

授業科目	スポーツ理学療法概論(次年度2年)		担当教員		
対象年次・学期			必修・選択区分		単位数
授業形態			授業回数	8回	時間数 15時間
授業目的	スポーツリハビリテーションの中で理学療法士が果たす役割、意義について理解し、実際の対象者との関わり方について理解することを目的とする				
到達目標	スポーツ理学療法の概要（歴史や社会的意義）について理解し、説明できる。 スポーツ理学療法の実践場面について理解し、実践できる。				
テキスト・参考図書等					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験		各講義内容についてのサマリーシートを提出（100点満点）し、60点以上で合格とする。 60点未満の者は、課題再提出とし60点以上を合格とする。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物	100			
	その他				
履修上の留意事項	事前の体調管理や着替えなどの準備をし、講義中の事故防止に各自で努めること				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	スポーツ理学療法総論	・スポーツリハビリテーション分野における理学療法についての概要を理解する		
	2	スポーツ理学療法総論	・スポーツリハビリテーション分野での理学療法が、様々な活動場面でどのように展開されているかを理解する		
	3	スポーツ理学療法と現場活動①	・スポーツ理学療法が実際の場面でどのように展開されているか見学を通して学ぶ（学外施設・現場見学：スポーツ関連施設を予定）		
	4	スポーツ理学療法と現場活動②	・スポーツ理学療法が実際の臨床場面でどのように展開されているか見学を通して学ぶ（学外施設・現場見学：医療機関を予定）		
	5	スポーツ理学療法とスポーツ活動復帰	・故障からの復帰を見据えたスポーツ理学療法の実践について、臨床現場で活躍している理学療法士の講義を通じて理解を深める		
	6	スポーツ理学療法と予防	・予防を見据えたスポーツ理学療法の実践について、健康増進・予防医学分野で活躍している理学療法士の講義を通じて理解を深める		
	7	パラスポーツ推進の取り組み	・パラリンピック・ムーブメントの理解とパラスポーツの社会的意義・施策について学ぶ		
	8	パラスポーツリハビリテーションに求められるインテグリティと資質	・パラスポーツに関わる理学療法士として求められる資質について学ぶ。		

[illegible]